オリジナルショートストーリー【nut】

茉月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オリジナルショートストーリー【ｎｕｔ】

【Ｎコード】
Ｎ９９３２Ｓ

【作者名】
茉月

【あらすじ】
男はロマンを求めていた。少女は１０年間男を思い続けた。男が１０年後に待っていたものとは…。

※他サイト及びブログにて掲載中。

１０年後、あいつの彼女になってあげて。
少女はその言葉をずっと心に持ち続けた。

ある朝。

「あんた、また旅？　今度はどこまで行くのよ」

「さあな。日本のどこかに俺を待ってる人がいるかも知れねえからな。見つけてやんなきゃだろ？」

「何それ？　歌の歌詞じゃあるまいし。あんたを待ってる人なんかいやしないわよ」

「姉ちゃんに男のロマンなんかわかんねーっつうの！」

「はん？　何がロマンだよ。現実逃避だろうが！」

「うっせえなー。姉ちゃんこそ、早く彼氏見つけて嫁にでも行っちまえよ」

２ヶ月後。

姉貴はホントに嫁に行っちまった。

急過ぎるだろ。彼氏いるなんて言ってなかったじゃねーか。

まぁ、念願のひとり暮らしが始まるってわけだ。

ホントはめっちゃ寂しいくせに。

両親を事故で無くし、姉弟ふたり暮らしだった弟は、大学など行ける環境ではなかった。高校を卒業後、すぐに建設会社で現場班として働いていた。

ある日の休憩時間、現場の木陰で休んでいると、ランドセルを背負った少女が、隣にちょこんと座って来た。

「なんだ？　なんか用か？」

「ここ、あたしのばしょ」

「えっ？」

「あたしがいつもかんがえごとするばしょ。おじさんは今日からここのげんばでこうじするひと？」

「おじさんじゃねーよ。まだ、おにーさんだ！」

「フッ…、ちっちゃいヤツ」

「あん？　おまえの方がチビだろうがよ」

「おまえじゃない！」

「チッ、じゃあ、名前教えろよ」

「ひとに名前をたずねるときは、自分から名のるのがれいぎでしょ？」

《このガキ》

「別に知りたかねーよ。おまえの名前なんか」

「えっと、わたくし、カナエともうします。あなたのお名前はなんとおっしゃるの？」

《なんだよ、こいつ》

「カナエか…。俺は…、シュウだ」

「シュウ？　じゃぁ、シュウ、またくるね」

カナエはバイバイと言って帰って行った。

「なんだよ、あのガキ。俺の事呼び捨てにしやがって」

それからカナエは時々現場にやって来ては、シュウにチョッカイを出していた。

現場が終盤に差し掛かったある日、いつものようにカナエが来た。

「もう少しでここの現場も終わる。カナエともおさらばだな」
「カナエのことわすれちゃう？」
「なんだ？　寂しいか？」
「べつに。さびしいのはシュウのほうでしょ？」
「何言ってんだ。ませたガキだよ」
「あ、そうだ。シュウ、これあげる」
そう言ってカナエは石を差し出す。
「なんだ？　これ？」
「カナエがパパといっしょにうみで見つけた石だよ。きれいでしょ？　ダイジにしてたんだ」
「そんな大事なもんなら、あげちゃダメだろ？」
「カナエとあそんでくれたおれいだよ。パパはいつも言ってた。カナエがありがとうと思ったひとには、おれいをしなさいって。だからもったいないけど、シュウにおれいあげるよ」
カナエの父は病気で亡くなっていた。４０にしてやっと我が子を授かり、これからと言う時に、さぞや無念だったであろう。
《生意気なガキだと思ってたけど、健気なとこもあんじゃんか》

「へぇ、カナエの親父はたいしたもんだな。そんじゃ、ありがたくもらってやるよ。あ、そうだ。ちょっと待ってろ」

シュウは現場から何やら持って来た。

「俺の暇潰し相手してくれたお礼だ。持っとけ」

「なにこれ。いらない」

「おまえ…。これはな、ナットって言って、すごく大事な部品なんだぜ。これでしっかり止めときゃ離れない力を持ってんだよ。スゲーだろ？」

「……。おれいならもらってあげる。これで、シュウもカナエもダイジなものあるからわすれないよね？」

カナエはそのナットをハンカチに包んで、ポケットにしまうと、笑顔で手を振り帰って行った。

カナエが歩いてると、女の人に話かけられた。

「ねえ、あなた、あの男の人に何もらったの？」

「だれですか？　知らない人とはなしちゃいけないって、ママに言われていますから」

「あら？　だったらシュウとは知り合いってわけ？」

「シュウ？　あ！　…もしかしてシュウのかのじょ？」

女の人はゲラゲラ笑った。

「私はあいつのリアル姉。マジ姉だよ。それにしても、シュウって呼んでるなんて、随分馴れ馴れしいのね～。あなた、シュウの事好きでしょ？」

カナエは一瞬赤くなった。

「あいつね、日本のどこかに俺を待ってる人がいるって、本気で思ってんのよ。男のロマンだとか言ってさ。バカでしょ？」

「たんじゅんなだけじゃないですか？」

「ヒュー。あなた冷めた子供ねー。でも頼もしいわ。そうだ！　もし、１０年後もあいつが独り者だったら、あなたが彼女になってあげてよ。１０年くらい経てば、あなたも大人になるでしょ？」

もちろん、姉は全くのジョークのつもりだった。

そして一気に１０年後。

ご想像の通り、シュウは独り身だった。

忙しくてなかなか旅にも行けず、気がつけば１０年が過ぎ去って

いた。
合コンとやらにもたまに参加はするものの、付き合う寸前で尽く断られていた。
「俺って女運に見放されてんのかなー。そんなダサくもねーし、悪くないと思うんだけどなぁ」
「お前は、恋愛ムードにかけるんだよ」隣で飲んでた同僚の眞田が言う。
「恋愛ムードってなんだよ」
「なんつーか女なんて要らねーよオーラみてえなもんかな？」
「なんだよそれ。バリバリ必要よ。女大好きよ。日本のどこかに俺を待っている女が絶対いるはずなんだよ！」
シュウはかなりの量の酒を飲み、相当酔っていた。
眞田は先に帰るぞと言って、自分の分だけ置いて店を出て行った。
と同時に隣に女性が座って来た。
「あなた、随分酔ってますねー。これ以上飲むと帰れなくなりますよ」
シュウは酔っ払ったうつろな目で横を向くと、肌が白く、黒髪の美しい女性がぼんやりと見えた。
「あん？……誰だおまえ？　俺んち、すぐそこなの、這ってでも帰れるっつうの！」

シュウの頭はすでにイカれていた。自宅まではタクシー使っても20分はかかる。

「そうなんだ。じゃあ、もう少し飲みなさいよ」

シュウは女性に煽られ、ついに躰ごと逝ってしまった。

翌朝。

「おはよう！　シュウ」

「……？」

「どうせ二日酔いだろうと思って、スープだけ作ってあげたよ」

「姉ちゃんか？」

シュウが起き出すと、そこには見たことない女性が自分のシャツを来てスープをよそっていた。

誰だよ！と言おうとして、自分が全裸なのに気付いた。

《ハッ！　えっ！　なに？　俺、ヤッちまったフラグ？　ヤバイ系？　ウソだろ？　じゃあこの女性（ひと）は誰なんだ？》

「どうぞ、召し上がれ。そのまま（全裸）でもいいわよ。くっ、くっ」

シュウは急いでボクサーパンツをはくと洗面所へ行き、顔を洗った。

「夢だよな…。こんなドラマみたいな事があるわけない！」

あったのだ。

「昨日はへべレケだったねー。なのにあそこだけは元気だなんて、信じらんない。現場の男は強いのね。くっ、くっ」

女は妙な笑い方をしやがる。

「あ、えっと…その…、俺…」

「シュウらしくないわね！」

そこで初めてハッとした。そう言えばさっきから、俺をシュウ呼ばわりしてる。って事は知り合いか？

「あの…。君と僕は知り合いですか？」

なぜか丁寧口調なシュウ。

女性は暫く沈黙の後、小さな布袋を差し出した。

「日本のどこかであなたを待っていたのはあたしよ」

その布袋の中身を見て、シュウは女性を凝視する。

「…！？　カナエ…」

「はぁーあ、やっと気付いた？」

「まさか…。君があのカナエなのか？　驚いたな～。きれいになってたから全く気づかなかったよ」

「ふっふっ、やっと大人になったよ」

「女は変わるもんだなぁ～。ん？　だからってなんでここにいるんだ？」

「シュウのお姉さんと約束してたんだ。カナエが大人になって、まだシュウが独りだったら彼女になるって」

いや、約束はしてないだろ。

「姉貴のやつ。どこまでお節介なんだ…」

「シュウ？　これからは旅に出なくて済むよね？　男のロマンってやつは終わりよ。あたしが彼女になるんだから」

「決めつけてんじゃねーよ！」

「あら、夜中の一撃で、この中に命が吹き込まれたかも知れないのよ？」とカナエはお腹をさすった。

「！…」記憶が全くないシュウは返す言葉がなかった。

「でも…、なんで俺がここに住んでるってわかったんだ？　家まで教えた記憶はないけどな」

「フッ……。あたしはいつもシュウを見てたよ。あの時からずっとね。シュウの彼女になるのはカナエだけ。カナエが大人になるまで、シュウには彼女を作って欲しくなかった。これでやっとシュウのものになれたんだよ」

ゾ、ゾ、ゾォーー。

シュウは愕然とする。

今まで尽く振られてたのは、自分の器量の悪さではなかった。カナエが仕組んだに違いない。

「俺に女を近づけさせないようにしたのは君の仕業か？」

「仕業だなんて言わないでよ。シュウにはものすごく素敵な彼女がいるから、手を出さないように、って、事実を言っただけだよ」

「事実じゃねーだろ！」

「シュウはもうカナエ以外を愛しちゃいけないの。カナエはシュウのためにきれいになったんだから。シュウ？　カナエはシュウのためならなんだって出来ちゃうよ。パパが言ってたの。カナエが好きになった人は絶対離しちゃいけないよって。だからシュウだけは何があっても離さない！」

カナエはシュウに抱きついた。

マ、ジ、かよーー！！

それにね…と続けた。

「シュウはナットをくれたでしょ？　離れないようにしっかり止める力があるって。あの時からあたし達は離れられない運命だったのよ。シュウはボルト。あたしがナット。ナットが弛まない限り繋がったままなのよ。シュウが繋げたようなもんじゃない？」

チ、ク、ショォーー！！

シュウの男のロマンは、カナエによって打ち砕かれた。

日本のどこかに、まだ俺を待っている女性（ひと）がいるかも知れないのに…。

「だから、いないっつうの！！」

朝日が射す木々の向こうから、姉貴の声が聴こえた気がした。

―完―

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9932s/

オリジナルショートストーリー【nut】

2011年5月4日19時25分発行